

大航海時代・宗教改革

その前の時代：カノッサの屈辱 win ローマ教皇 vs ローマ皇帝 lose

ローマ教皇十字軍を派遣(目的:聖地エルサレム奪還)→失敗
→キリスト教権力の失墜

【大航海時代】

原因：インドの香辛料が欲しいがオスマン帝国が邪魔・羅針盤発明→海を渡る！

東のポルトガル：

- ・バルメトロウ＝ディアス アフリカ最南端・喜望峰
- ・ヴァスコ・ダ・ガマ カリカット(インド)到達

西のスペイン：

- ・コロンブス 地球球体説(コペルニクス)→西に進めばインドに行ける！
レコンキスタ(イベリア半島のイスラム勢力追い出し)完成→イサベル 1 世支援→新大陸発見(インド?)→奴隷化
- ・アメリゴ＝ヴェスプッチ 新大陸認定 「アメリカ」の語源
キッカケ：ポルトガルの船航路から外れる→現在の南アメリカに漂着→インドだと思われていたがそんなにインドは南に長くない→インドではない！
- ・マゼラン 世界一周 大西洋(仲間割れ)→太平洋(広い)→現在のインドネシア
→現在のフィリピン(当時のスペイン王子フェリペ 2 世から命名)
→キリスト教布教(海外での布教を重要視)、王に殺される→部下が世界一周
スペインとハブスブルグ家：

- ・兼任王 カルロス 1 世(スペイン国王)＝カール 5 世(神聖ローマ帝国皇帝)
トルデシヤス条約 (アジアはポルトガルのもの、アメリカはスペインのもの)
- ・最強兼任王 フェリペ 2 世(スペイン・ポルトガル国王) 2 トップ国の王兼任
→スペイン「太陽の沈まぬ帝国」(世界の植民地のどこかは昼だ)
の(日本史)藤原家の摂関政治 皇室に子供を嫁がせるなど婚姻政策

【宗教改革】

ルネサンス(復興)：キリストを崇めるアート→人のためのアート

ヒューマニズム＝人文主義：人間性の尊重

～芸術作品等はここでは省略～

・ルターの宗教改革：

理由：キリスト教復権のためのサン＝ピエトロ大聖堂 made by ミケランジェロ

→予算が不足→天国行きのチケット(免罪符/贖宥状)を大量に売る

「95 か条の論題」を発表(ラテン語)→友人がドイツ語に翻訳・印刷・流布
→裁判 ローマ教皇からの刺客 vs ルター 撤回しない→破門する？(圧)
しかし、キリスト教権力失墜→破門が効かない

カール 5 世(神聖ローマ皇帝)国外追放→追手で弾圧→ザクセン選帝侯が匿う

聖書(ラテン語)を翻訳→教皇の悪用(民衆は読めない→捏造)を止めるため

・カルヴァンの宗教改革：(カルヴァン派:ユグノー、ピューリタン)

予定説の提唱：神は全能だから人生は全て予測済み→救われるかは既に決まっている→免罪符で運命は決まらない・商売/貯金 OK→主に商工業層に普及
の(日本史)鎌倉新仏教 親鸞「悪人正機説」

・イギリスの宗教改革：

ヘンリー 8 世(6 人の妻)：イギリス国教会の布教

男の子が生まれたい→離婚したい→カトリックでは離婚できない→新設！

宗教戦争・絶対王政期

【宗教戦争】

I オランダ独立戦争

オランダは当時スペイン領、スペインの主力キリスト教 OS はカトリック

→オランダでのカルヴァン派拡散→プロテスタント禁止

→オランダ独立戦争(1568~1609)勃発

カトリックの多い南部 10 州は脱落しスペイン支配下に残る

1579 北部 7 州はユトレヒト同盟を結成

1581 オランダ独立宣言 ネーデルランド連邦共和国を建国

1609 事実上の独立(国際承認は 1648 ウェストファリア条約)

→スペインは財政難化&無敵艦隊(アルマダ)vs イギリス海軍惨敗(1588)

→スペイン最強国時代の終結

II 神聖ローマ帝国の終焉

ルターの宗教改革・聖書翻訳/拡散→教会の嘘が大公開→カール 5 世困る

→帝国内でカトリック/プロテスタント選択 OK→両者入り混じって大混乱

→三十年戦争(1618~48)の勃発 ↓ベーメンは現在のチェコ西部

ベーメン反乱(新王フェルディナント 2 世がカトリック強制→反乱)

→神聖ローマ帝国の新旧両派諸侯が次々に参戦→各国が参戦

(スペインは旧教支援、デンマーク・スウェーデンは新教支援→フランスが新教支援→フランス vs ハプスブルグ家の構図に転換)

1648 ウェストファリア条約で終結、神聖ローマ帝国の分裂

分裂後有力 2 か国 オーストリア(ハプスブルグ家)とプロイセン(軍事新国)

オーストリア継承戦争(1740~48) オーストリア vs プロイセン

1740 ハプスブルグ家継承 マリア=テレジア ←女帝? 認めない! とプロイセンが喧嘩を売る→プロイセン側にフランス・スペイン等参戦→勝利

1748 アーヘン条約で終結

七年戦争(1756~63) 再戦→プロイセン勝利→ハプスブルグ・オーストリア衰退

【フランスの宗教戦争と絶対王政】

新旧教派の対立&貴族の権力闘争→

ユグノー(フランスのカルヴァン派の名称)戦争(1562~98)

カトリック=ド=メディシス(アンリ 2 世の妃)の画策

新旧派の対立を利用して王権強化→カトリックに傾倒→新教徒弾圧

1572/8 サンバルテルミの虐殺=旧教徒による新教徒虐殺→対立激化

1598 アンリ 4 世 ナントの勅令→新旧両方 OK で終結

ルイ 14 世の絶対王政政策 「太陽王」と呼ばれる 「朕は国家なり」

・権力集中の背景…ルイ 14 世の宰相マザランがルイの幼少期に政治の権限を担い、敵の政治家を次々に処刑、反乱鎮圧、議会を解散・機能停止

しかしマザラン死す→大人になったルイ 14 世&邪魔者がすべて消えた状態

・絶対王政の内部機構

常備軍…平時からいる軍隊、国王の私兵? 維持費がかかる

官僚制…王の命に従い国家行政事務を担う役人の集団

主権国家…明確な国土、確立した主権が存在する近代的な国家

王権神授説…王権は神からの神聖不可侵なものだ→絶対王政の正当化

重商主義…官僚制と常備軍維持の財源確保、国富増加のため、政府が経済に積極的に介入(重金主義→貿易差額主義)

・ルイ 14 世の悪政と散財

ヴェルサイユ宮殿の建設…建設費 30 兆円(?) 豪華な建築様式・屋内装飾
多くの戦争 引き際が悪く、ずっと勝てずひたすら戦費を浪費

南ネーデルラント継承戦争(1667~68)vs イギリス・オランダ・スウェーデン

オランダ戦争(1672~78)vs イギリス・オランダ・スペイン・オーストリア

ファルツ戦争(1688~97)vs 多くのヨーロッパ諸国→フランス領土一部放棄

スペイン継承戦争(1701~13)スペインと連合 vs 多くの国→多くの領土失う

プロテスタント禁止→カルヴァン派の商工業者(新しい富裕層)が国外へ

→財政難、ルイ 14 世死亡時には国庫破綻寸前

イギリスの2革命

【イギリス革命】

ヘンリー8世が創設したイギリス国教会→宗教戦争の影響を受けない

アルマダ海戦(1588)エリザベス1世 win vs lose フェリペ2世/無敵艦隊

1625 チャールズ1世即位→強権政治で国民の反発を買う→議会「権利の請願」

→1629 議会を解散、11年間議会無しの専制政治(独裁政治)を行った

1640 スコットランドとの戦費が必要→議会を招集→拒否→解散(短期議会)

→もう1回招集(長期議会、1653まで)→議会は国王の専制に反抗、王権制限

・ピューリタン革命(1640~60)の勃発

原因：短期議会、長期議会におけるチャールズ1世の強硬姿勢

1642 内乱に発展 内乱の構図は王党派(国王支持)vs 議会派

1649 チャールズ1世を処刑、共和政へ移行 クロムウェルを長とする

→クロムウェルが独裁的な政治(終身護国卿になろうとする→民衆の不满)

の終身独裁官カエサル(ユリウスシーザー)

1660 王政復古(チャールズ2世)→NG 専制政治→立憲君主制、王権制限

1685 ジェームズ2世の即位 カトリック優遇政策→民衆からの批判

・名誉革命(1688~89)が起きる…流血な惨事が起こらなかったことから命名

ジェームズ2世がカトリックの息子を後継者に指名したことでプロテスタント支配の継続が危ぶまれたため、プロテスタントの娘メアリと夫でオランダ総督のウィリアム3世をイギリスに招致。その際ウィリアム3世は軍を率いてオランダから上陸したが、ジェームズ2世は抵抗せず、フランスに逃亡した。

・権利の章典(Bill of Rights, 1689)

名誉革命後、議会はウィリアム3世とメアリ2世を共同統治者として承認、これにより王権は大幅に制限され、議会権力が強化。「君臨すれども統治せず」

1. 国王は議会の同意なしに法律を停止・廃止できない
2. 課税や常備軍の維持には議会の承認が必要
3. 議会の選挙は自由に行われるべき
4. 国民の自由な発言や請願の権利が保障される

イギリス革命の意義：

王権神授説の否定 議会主義の確立 立憲君主制の成立 市民権利の拡大

【イギリス産業革命】「世界の工場」と呼ばれる

技術革新 紡績機と蒸気機関

なぜイギリスか？

1. 豊富な天然資源：石炭(蒸気機関の動力)や鉄鉱石
2. 農業革命：農業効率が上がったため、余剰食糧 人手→都市部の労働者
3. 交通網の発達：運河、道路、鉄道整備→原材料、製品の輸送効率化
4. 金融システム：銀行制度や株式市場→資本の調達→起業・新技術導入
5. 植民地：植民地からの資源供給・市場を持つ

経済格差の拡大

資本家と労働者→支配階級と被支配階級 先進国と途上国→南北問題

アメリカ独立革命

【独立前のアメリカ史】

ピルグリム=ファーザーズがメイフラワー号でプリマスに上陸(1620)

原因：ジェームズ1世のピューリタン弾圧に対し宗教的自由を求めた

・第2次英仏百年戦争(1689~1815)…イギリスとフランスの植民地争奪戦

① アン女王戦争(1702~13)…スペイン継承戦争と並行して起きる。

② ジョージ王戦争(1744~48)…オーストリア継承戦争と並行して起きる。

③ フレンチ=インディアン戦争(1754~63)…七年戦争と並行して起きる。オハイオ川流域での領土争いが激化し、イギリスがフランス側に侵攻。戦争名はフランス vs インディアンではなくイギリス vs フランス and インディアンの意。イギリスが勝利。パリ条約(1763)でカナダとミシシッピ川以東の地を押さえ、北米における支配権を樹立。

→イギリスがおおよそ勝利。しかし戦費が大量にかかる。

【アメリカ独立革命】

13 植民地→北部では農業/工業/海運業 南部ではプランテーション農業

植民地議会…イギリス議会を手本に植民地それぞれに組織され、自治

・イギリス重商主義政策

イギリスが自国の産業保護を目的に行った経済政策。北米植民地では本国と重なる産業を規制、原料を生産させ、植民地の産業発展を阻害した。特にフレンチ=インディアン戦争以降は戦費を補填するため課税などを強化した。

羊毛品輸出入禁止(1699) 鉄製品製造の禁止(1750)

印紙法(1765)…あらゆる印刷物に印紙(Stamp)を貼る義務

→植民地の直接的影響→イギリス製品不買運動など反発→翌1766年廃止

「代表なくして課税なし」我々のリーダーを入れずに勝手に法律決めるな

茶法(1773)※茶に課税する法律ではない。…イギリス東インド会社の販売する茶を免税し販売価格を低下させて、会社の破産を救おうとしたが、現地の商人がイギリスの市場独占に繋がると猛反発

→ボストン茶会事件(1773)…アメリカ独立革命の発端の事件。茶法反対派の急進派がボストン港に停泊中の東インド会社の船を襲撃、茶箱を全て海に投げ捨てた。→イギリスはボストン港閉鎖、自治権剥奪、関係悪化

・アメリカ独立戦争(1775~83)の勃発

大陸会議…13 植民地の中央政府的役割、第1回は1774年、ボストン茶会事件に対する本国の弾圧法の撤廃を求め、第2回は1775年、ワシントンを植民地軍総司令官に任命、独立後は連合会議、憲法制定後合衆国議会へ引き継がれたレキシントンの戦い・コンコードの戦い(1775)…独立戦争最初の戦い。コンコードの武器の接収に向かうイギリス軍を植民地民兵が迎え撃つ

アメリカ独立宣言(1776/7/4)…トマス=ジェファーソンが中心となって起草、ロックの自然法思想に基づき基本的人権や革命権について述べたうえで、最後に独立を宣言。フランス人権宣言に大きな影響を与えた。

『コモン=センス』(1776)…トマス=ペインの著書。アメリカ植民地はイギリスに搾取されていて何の利益も得ていないので、「常識」的に考えて独立すべきと訴えた。短期間で12万部を売り上げ、フランス革命にも影響を与えた。

フランス参戦(1778) スペイン参戦(1779)→国内のイギリス領を攻撃し、イギリス兵力を一部釘付けにする→戦局はアメリカ側に傾く

ヨークタウンの戦い(1781)…ヴァージニアのヨークタウン港でアメリカ・フランス連合軍がイギリス軍を包囲、降伏させる→植民地側勝利を確定させる

パリ条約(1783)…イギリスはアメリカの独立を承認

・アメリカ合衆国憲法の制定(1787)…ワシントンを議長とする憲法制定会議で採択された。①外交・通商規制・徴税権などを与えて連邦政府の権限を強めた②中央政府が強くなりすぎないように三権分立を定めた③人民主権による共和政を定めた

・アメリカ大統領(1/2代ワシントン3代ジェファーソン)

1951年の憲法修正22条で3期以上務められない(ワシントンが3代拒否から)

・ワシントン(コロンビア特別区)…アメリカ合衆国の首都、1800年にフィラデルフィアから移転、いずれの州にも属さず連邦直轄地となっている。

フランス革命 I

【絶対王政の終結と第一共和政】

アンシャン=レジーム(旧制度)…16C からフランス革命前までの政治・社会制度

第一身分 聖職者。高位聖職者(貴族出身)と下位聖職者(平民出身)の内部格差

第二身分 貴族。総人口の 1.6%程度、全土の約 2 割の土地を所有

富裕貴族(自由主義的)と零細貴族(保守的)の内部格差

第三身分 平民。総人口の 98%程度、農民と市民(ブルジョワ)、内部格差

租税負担の義務があるが社会的発言権がなく、特権身分への不満

ルイ 16 世とマリー=アントワネットの政治体制下での財政難

原因:ルイ 14 世とマリー=アントワネットの散財・アメリカ独立戦争の協力

→まずは第三身分に重税(不満がたまる)→それでも無理→貴族も税金?

→貴族猛反発→三部会(全身分の代表集合)を招集(1789,175 年ぶり)

…平行線(貴族と聖職者「税金ヤダ」 市民「ふざけるな、話にならない」)

→国民議会(1789~91) 市民が三部会から離脱、最終的に三部会の議員も合併

(テニスコートの誓い(1789) 国王の国民議会の閉鎖姿勢に対抗し誓約を交わす)

・フランス革命の勃発

バステューユ監獄襲撃(1789)…軍隊招集に反発した民衆が武器弾薬を獲得

人権宣言[フランス](1789/8/26)…国民議会によって採択。フランス革命の理念を表す宣言。法の前の平等・国民主権・三権分立・私有権不可侵が規定

ヴェルサイユ行進(1789/10/5)…パンの値上げに苦しむパリの女性ら約 7000

人がヴェルサイユに行進し、宮殿に乱入。ルイ 16 世一家はパリに移され、革命派に監視されたため、国王は人権宣言を承認した。

(メートル法 「m」と「kg」を用いる。1790 年に国民議会が単位統一)

1791 年憲法…国民議会が制定したフランス初の憲法。立憲君主政、納税額による制限選挙、一院制議会などを主な内容としている。

ヴァレンヌ逃亡事件(1791) …ルイ 16 世一家が王妃の故国オーストリアに逃亡、絶対王政の回復を図るも、失敗。国民の国王に対する信頼は失われた。

ピルニッツ宣言…オーストリア・プロイセン王が革命を否定

・議会政治の開始

立法議会(1791~92)…1791 年憲法に基づき、制限選挙によって成立した議会

フイヤン派(貴族中心の立憲君主派)vs ジロント派(市民中心の穏健共和派)

対オーストリア宣戦(1792)…ジロント派内閣のオーストリアへの宣戦布告

→劣勢→義勇軍(志願兵)がヴァルミーの戦いで常備軍に勝利「この日、この場所から世界史の新しい時代が始まる(ゲーテ)」

8 月 10 日事件(1792)→宮殿を襲撃、国王一家を捕え、王権を停止する

国民公会(1792~95)…立法議会にかわり設立された議会。王権廃止と共和政を宣言した。この宣言からナポレオンの皇帝即位までの期間を第一共和政という。

フランス革命Ⅱ

【ナポレオンの時代】

革命終了後のゴタゴタ→周辺国が革命の波及を恐れ、潰そうと計画

→軍事の天才、**ナポレオン・ボナパルト**が抵抗

イタリア遠征(1796~97)…ナポレオンがロンバルディアでオーストリアとイタリア諸勢力を撃破。総裁政府はライン方面からの東進とイタリア方面からの北上の2方向からの攻撃でオーストリア打倒を目指す。1797年、カンポ=フォルミオの和約を結び、**第1回対仏大同盟**は崩壊した。

エジプト遠征(1798~99)…オスマン領エジプトへの軍事遠征。**イギリス**-インド間の連絡路を遮断することを目的とする。ナポレオンは、ピラミッドの戦いでオスマン軍を破るが、アブキール湾の戦いでイギリス軍に敗北。1801年、残存したフランス軍はイギリス軍に大敗、降伏。

第2回対仏大同盟(1799~1802)…イギリス・ロシア・オーストリア・オスマン帝国・両シチリア王国・ポルトガル間で締結された対仏軍事同盟。ナポレオンのエジプト遠征を機に結ばれた。

ブリュメール18日のクーデター(1799)…ナポレオンが**総裁政府**を倒したクーデター。結果**統領政府**が樹立され、ナポレオンの独裁(第一統領)が実現。

宗教協約(1801)…ナポレオンと教皇が結んだ、革命時否定されたカトリック教会の復権を承認→信仰の保障を与えられた農民層から支持拡大

アミアンの和約(1802)…イギリスとの講和条約。**第2回対仏大同盟**崩壊。

終身統領(1802/8)…国内での支持上昇を背景に**国民投票**→ナポレオン就任

ナポレオン法典(1804)…**法の前**の平等・**私有地財産**の不可侵・**契約**の自由などを規定した、ナポレオンが制定した民法典

ナポレオン皇帝期(1804~14,15) 第一帝政

第3回対仏大同盟(1805)…第一帝政に対抗するためイギリス・ロシア・オーストリアなどの間で結ばれた軍事同盟。

・対外戦争

トラファルガーの海戦(1805)…vs **イギリス**、ジブラルタル海峡でフランス・スペイン連合艦隊がイギリス艦隊と戦うも、敗北。本土侵攻を断念。

アウステルリッツの戦い(1805)…vs **オーストリア**・**ロシア**、フランスが勝利し、多額の賠償金を得、**第3回対仏大同盟**は崩壊。

(ナポレオンの作戦:ナポレオンは高所を押さえることで有名→相手が先回りする→明らかな弱点を作っておく→攻め込ませる→そこが罠)

→大陸を完全に掌握・次はイギリスに再挑戦

→**大陸封鎖令**(1806)…イギリスとの通商・寄港を禁止、兵糧攻めにする作戦

→各国はイギリスという市場を失う→密売が横行(**ロシア**・ポルトガル)

・反ナポレオン支配・革命の波及

スペイン反乱(1808~14)…ナポレオンは大陸封鎖令を無視するポルトガルに出兵、スペインに侵入・兄をスペイン王→反乱(イギリスの援助)

プロイセン改革(1807~)…農民解放・営業自由化など自由主義的改革(シュタイン・ハルデンベルグ・シャルンホルスト・グナイゼナウ・フンボルト)

ロシア(モスクワ)遠征(1812)…大陸封鎖令を破った**ロシア**に対し制裁として遠征を決行、退却するロシア軍を追い詰め、**モスクワ**占領「**戦争と平和**」

→ロシアは国民を避難させ、モスクワ大火を起こす(放火)→糧道を断たれる
→撤退と冬、寒さ・飢え・ロシア軍と農民の襲撃→兵士の大半死亡

ライプツィヒの戦い(1813)…vs プロイセン・ロシア・オーストリア連合軍、解放戦争の勝利を決定づける 1814年、**パリ**陥落、ナポレオン退位

→ナポレオンは**エルバ島**に追放→戻ってくる(**百日天下**)

ワーテルローの戦い(1815)…vs イギリス・オランダ・プロイセン連合軍、ナポレオンは再び退位→**セントヘレナ島**に追放→1821年没(享年51歳)

フランス革命Ⅲ ロシア史

【フランス革命のその後】

ウィーン会議(1814/9~15/6)…フランス革命後のヨーロッパ秩序再建のための国際会議。領土問題等で難航(会議は踊る,されど進まず) ウィーン議定書調印
ウィーン体制…ウィーン会議で形成された19C前半のヨーロッパ秩序。

正統主義…フランス革命前の王朝と体制が正統なので戻すべき

勢力均衡…同程度の諸国家で均衡を保ち特定勢力の国際関係支配を阻止する
復古王政(1814~30)…復活したブルボン朝。貴族院と代議院の立憲君主政。

ルイ 18 世…復古王政期のフランス王。ルイ 16 世の弟。カトリック国教化の一方、「憲章」を制定し、法の前の平等・言論出版自由など中道政治を行う。

シャルル 10 世…復古王政期のフランス王 part2。ルイ 16/18 世の弟。革命期から反動勢力の中心で、即位後も反動政治を行う→国民の反感

→七月革命(1830)…シャルル 10 世が未招集の議会を解散し、出版の制限や選挙制度の改悪などを定めた七月王令を発する→共和主義者に率いられたパリ民衆が市街戦に勝利、国王はイギリスに亡命。ルイ=フィリップ(国民王)が即位。

『民衆を導く自由の女神』(ドラクロワ)

→ルイ=フィリップも貴族優遇政策(株屋の王)→もう一回反感を買う

→二月革命(1848)…民衆が蜂起し国王亡命→第二共和政・ウィーン体制終結
→臨時政府が設置される 『レ・ミゼラブル』(ユーゴー)

ルイ=ナポレオン…ナポレオン 1 世の弟の子。二月革命後イギリスから帰国、ナポレオン 1 世の名声を利用し、1848 年 12 月の大統領選挙に圧勝。→1851 年 12

月にクーデターを起こし議会を解散、ナポレオン 3 世として即位、第二帝政

→クリミア戦争・アロー戦争などに勝利するが、普仏戦争(1870~71)でナポレオン 3 世自身が捕虜となり、フランス側が敗北、第二帝政崩壊。

→第三共和政へ移行

【ロシア】(常に南下して不凍港が欲しい国)

キエフ公国→モスクワ大公国

ピョートル 1 世(大帝)…西欧視察を行って技術・学問を導入、近代化

北方戦争(1700~21)…スウェーデン vs ロシア・ポーランド・デンマークのバルト海周辺での戦い。ロシア勝利、バルト海の覇権を握る。

エカチェリーナ 2 世…ドイツ出身、夫のピョートル 3 世からクーデターで帝位を奪う。海外進出をすすめた。

ポーランド分割(1772,93,95)…ロシア・プロイセン・オーストリアによるポーランドの併合。1995 年に全領土が分割されポーランド王国消滅。

ニコライ 1 世…内政では強圧的な専制政治、工業化を一部振興。

クリミア戦争(1853~56)…ロシアがオスマン帝国内のギリシャ正教徒保護を口実にオスマン帝国と開始した戦争。主な戦場がクリミア半島。オスマン帝国はイギリス・フランスを味方につけたのでロシア側が敗北。

アレクサンドル 2 世…クリミア戦争中に在位。戦争敗北後 1861 年農奴解放令などで近代化しようと画策。

ポーランド反乱(1863~64)…ロシアの改革運動に乗じてポーランドの民族主義者が起こした蜂起。ロシア軍の弾圧と農奴解放令で終息。

戦争等で活躍するも、不凍港を手に入れようとしたところでビスマルク(プロイセン)に邪魔され国民から不満を買い、爆弾を投げられ暗殺された。